

平成18年10月20日発行

発行：学校法人皇學館
編集：法人本部総務課

TEL 0596・22・6308

E-mail: soumu@kogakkan-u.ac.jp

皇學館学園報

第9号

■伊勢学舎

【法人本部・大学院・専攻科・文学部】
〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704番地
TEL 0596・22・0201(代) FAX 0596・27・1704

■名張学舎

【大学院・社会福祉学部】
〒518-0498 三重県名張市春日丘7番町1番地
TEL 0596・61・3351(代) FAX 0596・61・3350

●インターネットホームページ

http://www.kogakkan-u.ac.jp



講義の内容は統一テーマに沿ったもので、一般の人にもわかりやすく式年遷宮の意義・思想や神宮の歴史・祭り・信仰について解説された。

創立130周年・再興50周年記念事業

第62回 神宮式年遷宮

統一テーマ

伊勢の神宮を語る

記念講演会を開催

皇學館大学では、平成二十四年に創立百三周年・再興五十周年を迎えるにあたり、さまざまな記念事業を計画している。時あたかも平成二十五年は、伊勢の神宮の第六十二回式年遷宮が斎行される佳節に当たる。本学では前記事業の一環として、これに奉賛する記念講演会を両宮の遷宮が完了する平成二十五年まで、全国の主要都市で順次開催することとなった。

京都会場は百五十名を超える参加者

『伊勢の神宮を語る』と、式年遷宮の意義や思想、神宮の歴史や祭祀の実際の統一テーマのもの

人々にわかりやすく解説しようというこの企画は大いに注目を集めた。第一回目となる記念講演会は八月十九日(土)に京都市駅前のはろろプラザで集まった。当日は三部構成で午後一時半より開始。第一部は主管者という立場で全

般にわたり御援助下さった京都府神社庁の企画により、神宮御神宝の調製を担当している「京の匠」の講演があった。その講師は御神宝のつげ櫛調製者の「十三や」竹内伸一氏で、長年月にわたる厳密な製作活動の御苦労などについて話された。

第二部は本学の岡田(芳)助教授が「伊勢の神宮」と題したDVDを上映し、これに分かりやすく解説を加えた。第三部

平成18年度 講演予定

本年度は熊本県での開催も計画中です。

第3回 「神宮の歴史と遷宮の展開」

日時●10月28日(土) 13時30分～17時
場所●ば・る・るプラザ京都
講師●渡辺 寛教授
〈DVD解説〉本澤雅史助教

第4回 「伊勢の遷宮とその心」

日時●12月2日(土) 13時30分～17時
場所●京都市醍醐交流会館
講師●清水 潔教授
〈DVD解説〉岡田芳幸助教・学芸員

京都会場では当代随一の「京の匠」による講演も行われます。ご期待ください。

【第3回】弓 【第4回】金工
定員●150名

※京都会場は事前申込が必要です。お問合せは京都府神社庁(TEL 075・863・6677)まで。

文学部研究科修士課程 教育学専攻
前出 将志
平成十八年六月三日(土)と四日(日)の二日に亘り、第六十二回神宮式年遷宮御用材奉曳行事に皇學館大学から一日神領民の一員として参加させていただきました。三日は、二見興玉神社にて参拝し、二見の浜で採取された無垢塩草でお祓いを受ける「浜参宮」という慣わしに参加し、「浜参宮之証」と書かれた木札を胸にし、明日の奉曳を目前にして、胸が高なる一方、心身ともに清められました。そして、四日は、全身白装束を身にまとい、お揃いの法被に額には日の丸の鉢巻を巻き、胸には浜参宮の木札と新たに手にした御木曳と焼印された木札の二つをし、いざ伊勢市宮町の出発点に向かいました。すると、そこには同じ身なりを

した一日神領民が全国各地からぞくぞくと集まり、清められた白の大集団となっていました。その状況から、一層、身が引き締まる思いをし、今から行われる行事の清らかさと盛大さを肌感じました。私たちは、光栄にも最終日の最終の奉曳車を奉曳することになりました。奉曳車にかけられた綱を手に取り、伊勢市宮町を出発し、木遣り子の「エンヤ」の掛け声に先導され、一時間以上かけてゆくり前進し、着終点の外宮に御用材を運び入れることができました。両日共に天候に恵まれ、無事に「お木曳き」行事が催行された喜びと、千三百年余も継承されている日本の伝統文化に実際に参加できた誇りと感動は、日本人としての自覚を再認識する機会となりました。これからも、神宮の行事を始め、多くの行事に参加していこうと思います。

神道学科四年 木下 早由希
平成十八年六月四日、第六十二回神宮式年遷宮に向けて行われる「第一次お木曳」に参加させていただきました。前日の浜参宮では二見興玉神社に正式参拝しました。浜参宮祓詞や無垢塩草という祓具でお祓いし、興玉の舞の奏楽など、お木曳き前に心身破い清められました。当日、宮町から外宮まで、約二時間かけて運び入れました。今回が今年最後の陸曳ということもあり、地元奉曳団や全国各地から集まった一日神領民あわせて約二百人が参加し、皆が一丸となってエンヤの掛け声で曳きました。古式にのっとり、無事御用材を奉曳することができ、奉曳に携わったすべての人々に感謝の気持ちでいっぱいでした。また、このような形で遷宮に携われたことを光栄に思います。最後に滞りなく斎行されました。式年遷宮が滞りなく斎行されますことを、心よりお祈り申し上げます。

第62回神宮式年遷宮御用材奉曳行事に参加して

では、伴学長が「伊勢の神宮と日本人」と題し、神宮が本宗と仰がれる由縁や、天照大神が日本人の大祖と仰がれる意義などについて講演した。参加者は本学教員と実技を極めた「京の匠」による

記念講演会はこの後、九月三日(日)金沢で、同十六日(土)・十月二十八日(土)・十二月二日(土)に京都で開催される予定で、当代随一の「京の匠」による講演も行われる。申込み・問合せは事前に京都府神社庁(TEL 075・863・6677)まで。



うなずいたりメモをとったりするなど熱心に聞き入る聴衆者の姿が見られ、記念すべき第1回目の講演会は好評を博した。

金沢会場では活発な質疑応答

記念講演会は翌二十日(日)には金沢で開催され、百二十名余の参加者があった。社団法人霞会館などの共催により特別展「伊勢の神宮と神宝」を開催中の石川県立歴史博物館で行われたこの講演会では「皇學館大学公開セミナー」と銘づられ、午後一時に開会。最初に岡田(芳)助教授が京都と同じDVDを上映して解説し、休憩をはさんで伴学長が京都と同じ演題で講演した。年齢的にも階層的にも広範な人々が参加

他では聞けない講話を最後まで熱心に聴講し、午後5時に無事終了した。

スポーツ推薦・指定強化クラブ制度を導入 文武両道の伝統が甦る

平成十九年度入学試験においてスポーツ推薦枠が新たに設けられたを受け、大学側が重点的に支援していく指定強化クラブ制度の導入が決まった。もとより本学には神宮皇學館以来「文武両道」の気風が流れており、また少子化の波が急速に押し寄せるなか知名度アップへの期待もかかる。今年度、同クラブ制度に選ばれたのは柔道部・陸上部の二つ。その活動を追った。

「考える柔道」をめざして

柔道部

「運動だけ出来ればよい、というのが昔の話です。」
こう話すのは、柔道部の部長を務める増井節郎教授だ。「ベスト8まででたらら力技で狙えるでしょ

う。しかし、それ以上をめざすなら、頭の良さと精神力が求められます」
言葉を裏付けるように、増井教授はいつも部員一人ひとりにその練習を行う「根拠」を質す。た

だ体力を消耗するだけの練習は無意味でありケガの心配が増えるだけだからだ。やがて、部員たちは自分たちで考え始めた。弱点を克服するにはどんな技を磨けばいいか、長所を伸ばすには何を鍛えればいいのか。そして、自ら小さな課題

を見つけてコツコツ取り組むうち、チーム全体が強くなってきたという。
遠征で実践力を身につける



部員の信頼厚い増井節郎教授。

今年三月に強化クラブに指定されたことで、部活動に一層の弾みがついた。なかでも大きいのは、予算が増えたことにより遠征試合が可能になったこと。練習の成果を試すには、やはり実践が必要だ。瞬時の判断力や対応力など本番だからこそ養えるものも多く、また、体格も技もさまざまな他大生と交流することで自らを客観視できる。

さらに、増井教授は学外コーチ五人を招いての特別指導を検討している。背負い投げや寝技などそれぞれの得意技を模範演技として披露していただき、美しく流れるような身体の動きを部員に体感させようというものだ。柔道に対する心構えなど精神面の鍛錬も期待する。

通常、体力は二十歳頃をピークにだんだん落ちてゆく。しかし、小木曾一之助教授率いる陸上競技部ではほとんどの選手は次々と自己新記録をマークしているという。その秘密は「科学的トレーニング」だ。小木曾助教はフィンランド・

科学トレで自己新が続出

陸上競技部



一人ひとりの特長にあった練習方法を考え、データを中心に科学的な視点で指導を行う小木曾一之助教授。部内の雰囲気は明るく、先輩後輩の関係も良い。

ユバスキュラ大学大学院で博士(スポーツ科学)の学位を取得し、「学生のための健康科学」「陸上競技を科学する」など著書も多い。

部員には筋力や持久力など身体の各データを元にオリジナルの練習メニューを作成。選手がどのレベルにあるか、スキルアップのために何が必要かなど科学の視点に基づきアドバイスする。やがて、自己ベストや皇學館大新記録を更新する部員が続出し、互いに切磋琢磨しあうなど雰囲気も良くなった。

また、チーム全体の力が向上している中での強化クラブ指定は、部員にとって大きな励みでもある。寄せられる期待をエネルギーに替えて、「どんな日でも練習でついでに、全天候型のグラウンドがほしい」と部員産も今まで以上に意欲的だ。

海インカレで女子が総合四位に入賞するなど着々と成果をあげているが、小木曾助教が部員にいつも言い聞かせるのは「成績は結果であって目標ではない」ということ。他人との比較ではなく、昨日の自分と比べどれだけ成長しているかが何より大切だと説く。同部に所属する学生の中には、卒業後、教育現場に立つことを希望する者も多い。陸上を通して学んだ指導のあり方は、今後彼らが教員となったときの指針となるはずだ。

平和への願いを込めて 戦没学徒慰霊碑の建立

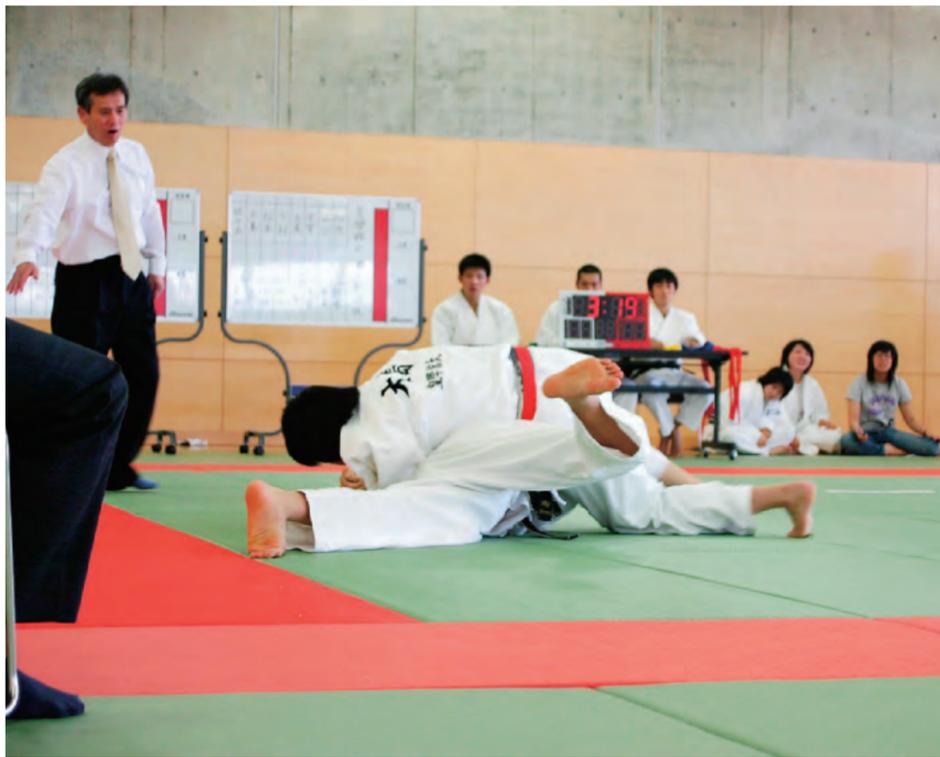
平成十八年二月十一日に竣工慰霊祭が執り行われた。



が発令され、神宮皇學館大学から在学生の四割を超える百五十一名の学生が出征。うち十二名が尊い命を祖国のために捧げられた。当時の山田孝雄学長は学業半ばにして国難に殉せんとする学生のために旧六角講堂において壮行送別会を開催し、最後の特別講義を行った。伝えられるところによると満堂寂として声なく、万感胸に迫ったという。木陰に建つ慰霊碑を前に、平和への思いを新たにしたい。

戦後六十周年の節目にあたり、本学では伊勢学舎旧六角講堂跡地に戦没学徒慰霊碑(流政之氏作)を建立し庭園として整備した。由来記によると大東亜戦争が熾烈を極めた昭和十八年十月、文科学徒の徴兵猶予停止

時代」を迎えるといわれている。スポーツ強化は学生確保が厳しさを増す中での対策の一つであると同時に、本学の伝統「文武両道の精神復活への大事な足がかりになる」といえる。



体育館完成後初の試合で互いに日頃の練習の成果をぶつけ合う選手たち。観覧者も思わず身を乗り出し声援を送る白熱した闘いとなった。

総合体育館落成記念行事
気持ち新たに汗流す
皇學館高校・大学 柔道部

新総合体育館完成を祝う記念行事の最後を飾るイベントとして、六月二十四日(土)に柔道の交流試合が行われた。高校の部は静岡学園高等学校と対戦し三勝二敗一引分け、大学の部は岐阜県学生柔道連盟選抜チームと戦い四勝三敗一引分けと奮闘した。
皇大柔道部主将の松本佳恵さんは「前に比べ豊かソフトになり、ケガの心配がなくなった」と質の高い練習環境をかなえる新しい道場に満足した様子。一会場増設されたこともあり、今後、他校との交流試合を積極的に行っていきたくと話す。また、強化クラブに指定されたことでヤル気が増した、とも。期待に応えられるよう気を引き締めて取り組んでいきたいと抱負を語った。



競歩は今年も東海インカレでみごと優勝!

教員の道で活きる指導力
この五月に行われた東

伝統復活と知名度向上への期待
二〇〇四年七月に文部科学省の諮問機関である中央教育審議会が公表した試算によると、来春は大学・短大の志願者数が入学数と一致する「全入

二日間にわたる開催は十一年ぶり

長崎で館友全国大会を開催

八月二十六日(土)、二十七日(日)の両日、長崎市のホテルニュー長崎において、平成十八年度の館友全国大会が開催された。十一年ぶりの二日間にわたっての開催となり、二十六日には午後四時より支部長役員会、午後五時より懇親会が全国大会に先立ち催された。懇親会は、胡弓、琵琶、七弦琴の幻想的な演奏から始まり、遠路参加された館友諸氏の久しぶりの再会を喜び、和やかな雰囲気の中、大いに盛り上がった。その後、日本三代夜景といわれる長崎の一万ドルの夜景を見学に行く者、同期会に参加する者等大いに長崎の夜を楽しんだ。



懇親を深め、久しぶりの再会を喜び合う参加者。盛会のうちにお開きとなった。

田博二氏による「国際貿易都市長崎の歴史と文化」と題して、ポルトガル、オランダ、中国との関係から現在に至る文化

学校法人皇學館の役員改選される

平成十八年八月二十六日に任期満了となる役員の改選が理事会・評議員会で行われ、満場一致を持って承認された。創立百三十周年・再興五十周年記念事業が継続中であり、学内の諸改革に手腕を発揮されている上杉千郷理事長以下も重任され、新たに常任理事に、大神神社宮司の鈴木寛治氏、理事に伊勢市長の森下隆生氏に就任を願った。

について、分かりやすく懇切丁寧に説明された記念講演があった。最後に清興として「長崎くんち龍踊」が披露された。名残の尽きない中、次回伊勢での再会をお互い誓い合い、正午前盛会のうちに全日程を終了した。

Table of board members and their terms. Columns include Position (e.g., 理事長, 理事), Name (氏名), and Term (任期).

創立百三十周年・再興五十周年記念事業寄付者芳名⑧

創立百三十周年・再興五十周年記念事業募金につきまして、学内外の方々から変わらぬ励ましの声とともにその後も多くの芳志をいただきました。みなさまのご理解とご好意に心より厚く御礼申し上げます。ご協力いただいた方々の芳名を掲載させていただきます。事業活動の一層の充実をはかるべく、今後ともどうぞよろしくお願い致します。芳名掲載につきましては、八月三十一日までの到着分とさせていただきます。

Table showing donation progress for the 130th anniversary and 50th re-founding anniversary. Columns include Category (区分), Number of Applications (申込件数), and Amount (金額).

Table of donors from religious organizations (宗教界) and shrines (神社界). Columns include Organization Name, Amount, and Address.

Table of donors from individuals (個人). Columns include Name, Amount, and Address.

Table of donors from companies (企業) and other categories (篤志・その他). Columns include Company Name, Amount, and Address.

Table of donors from the parent organization (本法人関係). Columns include Name, Amount, and Address.

募金のお願い

現在まで多数のご協賛をお寄せいただいておりますが、この記念事業を完遂するためには、なお多くのご協力を仰がねばなりません。つきましては、厳しい経済状況にはありますが、この事業に託す本学の意思と熱意をお汲みいただくとともに、学校法人皇學館の明日にご期待いただき、格段のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

問い合わせ先/学校法人皇學館 記念事業推進室 〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704 TEL0596・22・6313 FAX0596・27・1704 E-mail suishin@kagakkan-u.ac.jp

学園ニュース



皇學館高校 野球部 初の東海大会出場! 岡部監督就任3年目での快挙

来春のセンバツ甲子園出場の鍵を握る「第五十九回秋季高校野球東海大会」へ、皇學館高校野球部が初出場を決めた。創部五年目、岡部博英監督就任三年目にしての快挙。この吉報に、学校関係者をはじめ地元市民からは「ホッとしたり」「がんばってほしい」と喜びや期待の声があがった。

四日市工を 四〇で降す

秋晴れの九月三十日、東海大会への最後の一戦をかけた三位決定戦が四日市市営霞ヶ浦球場で行われ、本校が四一〇と四日市工業高校を突き放して出場の切符を手にした。チャンスが訪れたのは



一戦一戦を大事に闘っていきたくは岡部監督。くバントで無死満塁に。そこへ、三橋哲也選手が走者一掃のタイムリースリーベースヒットを放ち、本校初となる東海大会出場権を手に入れた。

六日間で フォーム改造

「すばやく気持ちを切り替えたのが良かったんではない」と岡部監督。準決勝で海星に敗れたものの、まさに背水の陣となったこの試合に、部員たちは集中力を途切らせることなく臨んだという。また、高野連派遣の理学療法士に長谷川朋希投手が球を投げた際のバランスについて指摘され、フォームを改造したのも功を奏した。三位決定戦まであと六日という



「全員で勝ち取った切符」と話す下村捕手(右)。三橋選手は「新しい歴史をつくりたい」と闘志を燃やす。

県大会結果(東海大会出場校)

【三重】	①海星 ②菟野 ③皇學館
【愛知】	①中京大 ②東邦 ③愛工大名電
【岐阜】	①大垣日大 ②中京 ③大垣西
【静岡】	①常葉菊川 ②常葉橘 ③浜松工

東海大会

準々決勝	10月29日	四日市市営霞ヶ浦球場
準決勝	11月4日	四日市市営霞ヶ浦球場
決勝	11月5日	四日市市営霞ヶ浦球場

教育勅語の謹書を奉納

7月31日 明治神宮に

伝統の学校行事

高等学校においては、昭和三十八年の開校以来、建学の精神を継承し

た教育を行っている。教育勅語については、昭和四十一年十月、当時の野口恒樹校長の時に全校で謹書を行い、これ以降、本校の恒例行事となっている。本年も例年のごとく、昨年十月に高校及び中学校の教職員、生徒全員が謹書したものを装丁し、七月三十



当日は、上杉理事長(後列右から3人目)をはじめ高校・中学生徒代表あわせて計7名によって奉納させていただいた。



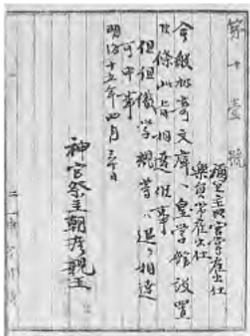
神宮制度の確立をはじめ「神宮明治祭式」の完成など朝彦親王のご業績は数多い。

皇學館創立のルーツを探る「2」

創立三十年・再興五十年の光彩 ②

前回、皇學館の源流と述べて。今回はいよいよもういづき林崎文庫と豊宮崎文庫の存在について触れたい。

神宮皇學館の創立は明治十五年四月三十日、式年遷宮の山口祭のために伊勢を訪れていた久邇宮朝彦親王(一八二四〜一八九一)より皇學館を設立する旨の令達が出されたことによる。昔には文明開化の嵐が吹き荒れ、目新しい欧米文化の流入に日本固有の精神までもが色褪せつつあった時



朝彦親王令達(神宮司庁公文類纂)

代。孝明天皇の右腕として手腕を発揮し神宮祭主であった朝彦親王は日本古来の伝統を尊び、古儀復活をめざしたのであった。その信念の深さは、規則第一条に見てとれる。本館設立ノ大意ハ、専ラ神宮ニ関スル古伝ヲ明ラカニシ、其他神典国史律令格式地理物産民俗語学等ニ至リ、生徒ヲシテ之ヲ習熟セシ

メ、以テ其成材ヲ要ス「神宮に関する古伝を明らかにし」と特記し、また優秀な者は終身神宮に奉職せしめると規定している。もとより朝彦親王は教学に深い関心があり、京都の御邸においては神職を集めて『古事記』などの講義を行っていた

ほど後進の育成に心を砕いていた。本学史料編纂所の岡田登教授によると、占領軍によって廃学させられるという憂目をみる以前は「東の東大、西の皇學館」と称されるなど、学問の道を志す若者にとって憧れの学舎だったという。創立百三十年・再興五十周年の節目に向けて一丸となって取り組んでいる今、ここで学ぶ意義を改めて問い直したい。先達の思いに報いるためにも。



厳かな雰囲気の中、教育勅語を奉唱。

当日は、午前八時過ぎに伊勢を発ち、明治神宮へは午後二時過ぎに参拝を行った。またその折、神前において全員で教育勅語を奉唱した。代表生

徒たちはそれぞれ、インナーハイに向けての強化合宿、オープンキャンパスや課外授業など、忙しい日程の間を縫っての参拝であったが、都会とは思えない宮域の清々しさ、身の引き締まるような厳粛さを体験し、帰途口々にその感動を語っていた。真夏にしては比較的涼しい日であったが、建学の精神を改めて自覚する貴重な一日となった。

のびぎく国体

九月三十日から兵庫県で開催された「のびぎく国体」に、本学皇學館高校の学生が県代表として参加した。結果は左の通り。

皇學館高校の県代表選手・監督	
柔道部	中川 太喜 [無差別級・大将] 中川 裕喜 [73kg以下級・次鋒]
剣道部	北川 裕也
弓道部	河井 怜愛華
バスケットボール部	県代表 監督 吉川 太郎 中村 有衣
陸上部	山本 ひかる [4×100mリレー] 森本 詞織 [走り幅跳]
バレーボール部	山本 峻也 行岡 諒 片淵 貴史 齋藤 匠 中北 康貴
■試合結果 三重県代表チームの成績	
柔道	第2回戦 敗退
弓道	予選落ち
剣道	第1回戦(対石川県)敗退 ただし、先鋒であった北川君は、面、諸手突きを決めて快勝
バスケットボール	ベスト8進出 全国第5位
陸上	森本、10位 山本は、準決勝まで、決勝進出ならず
バレーボール	第1回戦(対石川県)敗退